

2022年4月8日（金）～9日（土）

旧東海道ブラ歩き(17) 桑名宿一亀山宿

今回は伊勢国桑名宿から亀山宿までの約40kmを1泊2日で歩いた。初日は桑名の船着き場から日永の追分（京・大阪方面と伊勢方面への分岐点）まで20km強、二日目は追分から亀山宿まで20km弱、歩数は初日43000歩、2日目41000歩、合計84000歩であった。今回のハイライトは四日市での数十年ぶりの中村夫妻との会食と懇談、佐佐木信綱一色の石薬師の街、一人で軽乗用車で全国を旅している松永さんとの邂逅、それに季節柄あちこちで見とれるような美しい桜の花々を愛でることが出来たことである。他方、今回は旧街道沿いにはコンビニがほとんど無く（特に初日は1軒もなくトイレに不自由であった）、勿論気の利いたレストランやコーヒー屋もなかったのが一寸残念だった。ホテルは四日市都ホテルで、これは京都蹴上の都ホテルと同じ系列のホテルで、Superior Roomに泊まったこともあり部屋はゆったりで、ベッドの具合も良く熟睡できた。ここで60年以上も前にワグネルオーケストラと一緒に弾いていた中村さんご夫妻にご馳走になった和食は最高だった。

今回は同方向に旅をする一人歩きの女性と初日、二日目と前後になりながら色々と話をした。

次は愈々鈴鹿越えだ。今回歩いてみて暑いよりも寒い方が歩きやすいことに気づいた。次回は暑くならないうちに鈴鹿を超え一旦帰京の上、梅雨のかなり前に三条大橋に到達したいと思っている。まさに嘘から出た誠とはこのことである。

Day 1、 桑名一追分 4月8日（金）快晴 日中暑し

前回同様6時28分品川発の「ひかり」で出発。名古屋で下車しJRで桑名まで行く。桑名駅到着後宮からの船着き場までタクシーを飛ばし、そこにある七里の渡し跡の解説を読んで9時20分に歩き始める。現在は以前の船着き場の前に堤防が構築されたため、江戸時代の眺めは見られない。船着き場には料亭らしきものが何軒もあり当然焼き蛤の広告も出ていたがどの店もまだ開店前でこれを賞味できなかったのは残念な次第だった。

歩行開始2時間後の11時20分ごろ西光寺の美しい桜を見て朝日町に入る。近鉄の伊勢朝日駅とJR関西本線の朝日駅の前を続けて通ったので念のために駅のトイレを見に行ったところ両方共ない。緊急ではなかったが、今後この状態が続くと覚悟する。なお、家内の事前の調査で今日は街道沿いにコンビニが一軒もないことが分かっているので水分の摂取には気をつけるが、だんだん暑くなってきて上着を脱ぎ、セーターまで脱ぐ羽目になり

水分抑制はややボディブローの感がある。なお、朝日駅辺りから横浜に住む一人旅の女性で同じく京都目指して歩いている人と会うが、相手の方が早いのでおいていかれる。

11時43分、朝明川を越えて四日市市に入る。すぐ先に立て看板があり広重による朝明橋を越える人の絵の模写がある。また、その看板にはシーボルトの写真もあり、同氏が長崎から江戸に行くオランダ館館長に随行して四日市に上陸して江戸に向かったとの解説がある。

12時過ぎに近鉄とJRが交差する辺りで空腹のため他人の家の軒先を借りて前日買ってあったダロワイヨの塩パンを食べ紅茶を飲むが、この塩パンがベラボーにおいしかった。15分ほどここで小休止。

12時33分富田の一里塚通過。日本橋から98里だそうである。そこから十四川を渡り13時6分「左四日市右いかるが」との道標にさしかかる。斑鳩と聞いて奈良に想いを馳せる。なお、ガイドブックには十四川の川岸は桜の名所とあるが、ここに限らずほとんど全ての川岸には桜並木があり、未だに満開の花をつけた木も結構あって、今回の旅の全行程で大いに目を楽しませてくれた。平安末期から鎌倉初期の歌人西行の「願はくは花の下にて春死なむ その如月（きさらぎ）の望月（もちつき）のころ」ではないが満開の桜の下で死ねれば最高だろう。

13時40分光明寺前通過。この後国道1号線に少しだけ合流し、そこを歩いているとなが餅の老舗笹井屋があったので14時頃空腹を抱えてここに飛び込み「なが餅」を食べる。ここを出て国道に戻り海蔵橋を渡るが、桜が見事（写真1）。ここから再び国道から左にそれて旧道を歩き、再度国道を越えて四日市中心部に到着。このアーケードでこの日初めて洒落た喫茶店を見つけて入り、珈琲とケーキで30分ばかり休む。今日のホテルはすぐ側だが、明日の行程が長いので更に南に向けて16時に出発。最終的にあすなろう鉄道（駅が7つしかないローカル線）で5つめの追分駅まで歩いた。ここは京・大坂方面と伊勢への分岐点である（写真2）。17時半頃の電車で四日市に戻り、ホテルにチェックイン。部屋はゆったりして気持ちが良い。暫時休憩の上、ロビーで大学時代のオーケストラの仲間と四日市在住の中村さんご夫婦に会い、ホテル内の高級和食レストランの個室でおいしい和食を満喫し、久しぶりの歓談を楽しんだ。中村さんは卒業してすぐにトヨタ自動車に就職し、トヨタがパブリカを発売直後にこれを購入、当時挙母市とっていた現在の豊田市の彼の寮から二人で出来たばかりの名神高速を走って京都まで行ったこと、学生時代に二人で志摩半島に遊んだこと、同君の父君にお目に掛かって色々なお話を伺ったことなど一瞬のうちに思い出す。矢張り学生時代の友は良いものだ。同氏は特に退職後に奥様と共にクルーズも含めて何十回と無く海外旅行を楽しんでおり、我々夫婦も割合に外国に

行っていたのでこの点でも話が会い、実に愉快だった。料理の後もロビーの宿泊者用のラウンジで飲み物サービスがあったのでそちらに移って 21 時半頃まで話し続けた。同氏は伊豆・箱根にもしばしば行くというので、今度は示し合わせてそちらで会おうということにして別れた。料理をご馳走になり恐縮の至りだ。

Day 2、 追分-亀山 4月9日(土) 快晴 日中暑し

朝 8 時 14 分四日市発のあすなろう鉄道で昨日の終着点の追分駅に 8 時半に到着、直ちに歩き始める。なおこの電車で昨日会った横浜の女性も乗り合わせており一言二言挨拶を交わすが彼女は一つ目の赤堀駅で下車する。9 時を過ぎたところで江戸から 401.17km の標識がある。10 時前に今回の旅行で初めてコンビニがあったのでコーヒーを飲んで一休み、10 時 23 分国分の交差点を超えたところで鈴鹿市に入る。

少し歩いた先が急坂で名高い杖衝坂で、今回の旅きつての難所である。このためだけに家内は杖を持参し、早速リュックから下ろして調整をしている。確かに急坂だったので我々は登るのに夢中で専ら足下を見つめて一気に上り詰めた。実はここは深手を負った日本武尊が剣を杖にして漸く登り切ったという伝説のあるところで、登り切ったところには日本武尊が足の出血を封じた血塚社があるほか、途中で芭蕉の「**歩行(かち)ならば杖つき坂を落馬かな**」の句碑、或いは弘法大師が水に困った村民のために掘り当てた弘法の井戸など見所満載だったのだが、このときは登ることにのみ気をとられて何も見なかったのは一代の不覚であった。ここを過ぎて歩いているとリュックを背負っている男性とすれ違ったので声をかけたところ近辺に住むひとで、地元の案内所の仕事もしているということで近郊の名勝案内のパンフレットの他、鈴鹿越えの資料などをくれた。これは次回の計画を立てるに際して大いに助かる。

10 時 43 分石薬師宿に入る。ここで旧道は国道の地下を潜って右に出ることになっていたが、偶々国道の車の流れが止まったのでこれ幸いと早足で横断するという得意技を繰り出した。子供達からは怒られるが階段の上り下りによる体力消耗を避けるためのやむを得ない選択だ。10 時 45 分すぐ先の自由が丘の信号を越えたところに石薬師の詳細な案内板がある。その近くの北町地藏堂で桜がきれいだったのでそこで一休みする(写真 3)。11 時 4 分に小澤本陣跡に到着。ここには現在その子孫が住んでおり、現存する宿帳には浅野内匠頭や大岡越前守などの名が残されているとのこと。この道の先達である友人の吉田さんたちは偶々そこから出てきた女性に依頼して室内に案内され、主人から宿帳その他の本物を見せられるとの幸運に遭遇したようだが、柳の下のドジョウを狙って小生も暫しここに佇んでいたところ中からごほんごほんとの女性の咳が立て続けに聞こえ、早々に諦めて退散した。なお、この辺りで後ろから追いかけてきた件の横浜の女性に抜かれる。ローカル

線で4つも手前の駅から歩き出したのにこんなに早く抜かれる。我々のペースが如何に遅いかの証左である。年齢を考えるとやむを得ない。

石薬師には万葉集の研究その他で有名な国文学者で、誰でも知っている唱歌「夏は来ぬ」の作詞者でもある佐々木信綱の生家があり、石薬師宿を出るまで信綱の歌からカルタ用に五十のうたを選んで随所に立て札がある。例えば

- ・一すぢの煙をあとにのこしおきて 沖をはるかに船はゆくなり (信綱 10 才の作)
- ・いきいきと目をかがやかし幸綱が 高らかに歌ふチューリップのうた (幸綱は孫)
- ・蟬時雨石薬師寺は広重の 画に見るがごとみどり深しも
- ・ますらをの其名とどむる蒲さくら 更にかをらむ八千年の春に (源範頼の蒲桜伝説)
- ・万葉の道の一道生のきはみ 踏みもてゆかむころつつしみ

という具合である。まさに街中信綱一色だ。

11 時 22 分信綱の生家を訪ねると、例の「卯の花の匂う垣根に時鳥一一」の歌をながしてくれる。なかなか立派な家だ。ここで入手した年表によると信綱はここに 6 歳までいて松坂に転居、そして明治 17 年 13 歳で東京に出て東京大学古典講習科入学、17 才で大学卒業とある (年齢は数え年)。今と学制が違うにしても大変早熟である。信綱の父も著名な日本学者だったこともあるのだろう。昭和 12 年には 66 才で第 1 回文化勲章を受章している。その時のうたが上述のカルタの最後のものである。今更遅すぎるが少しでもあやかりたいと思って生家で写真を撮る (写真 4)。庭には卯の花が咲き始めている。Golden Week の頃満開だそうだ。ここで記念に卯の花の押し花の着いたしおりを購入。

昨日の経験に懲りて記念館の人にランチの場所を聞いたところすぐ側にうどん屋があるというので立ち寄る。天ぷらうどんが結構おいしかった。その後田んぼの中を歩いて庄野宿に到達、13 時 21 分旧小林家住宅に着く。ここは庄野の資料館で各種貴重な古文書等を展示してあるようだが、時間の関係で正面から眺め写真を撮って通過する。その案内板には広重の庄野白雨の模写とその解説がある。それを見ると突然の驟雨の中を駕籠かきがふんどし姿で駕籠を担ぎ、旅人も傘を飛ばされそうになりながら先を急ぐという構図で、広重の五十三次の絵の傑作の一つだそうだが確かに面白い絵だ (写真 5)。

ここに到達する大分前から香川ナンバーの軽乗用車に乗った人が一人で道標など見所のところに止まってしきりに写真を撮っており不思議に思っていたが 13 時 27 分に我々が問屋場跡に差し掛かるとその人がそこを熱心に見ている。思わず両方から手を振り合って挨拶を交わしてみても実に驚いた。写真 6 で手ぬぐいを頭に巻いて車を運転していたのは松永忠志さんという人で香川県の人だが、車で全国を回るのが趣味で、すでに全国の「道の駅」は走破した。今回はこの近郊の遺跡や名所を廻っているとのこと、車ではちょくちょく見

落とすので都度引き返して写真に収めていると言うのではない。しかもその結果を自分で印刷して本にしている。実際に見せて貰った。中でも得意中の得意は四国八十八カ所の霊場巡りとのこと。更にびっくりしたのは後部座席のカーテンを開けるとそこには簡単な布団が敷いてあり、小さな机があって自炊も出来、食事も出来るようになっている。宿泊は専ら道の駅だそうで、そこで朝歯を磨き顔を洗うのだそうだ。お互いに名乗りあい健闘をたたえ合った際に先方は名刺をくれ、そこに Website のアドレスがあったのでそこにアクセスしてみると四国八十八ヶ所霊場から弘法大師伊予十二の霊場巡りなど写真と解説が載っている。おまけに般若心経の頁もあり、ただただ驚くばかりである。名刺には四国八十八ヶ所霊場公認先達との肩書きがあり、自宅の住所と電話はあるが今は確実にそこにはないので、折を見て手紙か電話で連絡をして見ようと思う。興味のある向きは下記を参照願う。世の中には凄い人がいるものだ。

<http://tadashimatunaga.web.fc2.com/>

話を戻して、旧東海道は再び国道を潜って南側に来るのでそれに沿って進む。この場所に限らず三重県の全ての旧道に言えることだが、道幅が狭く歩道は道路に色がついて区分されてはいるものの一車線しかない車道を両方向の車が結構なスピードで行き交う。結構怖い道だ。途中女人堤防碑（水害を防ぐため女性だけで命をかけて堤防を築き、処刑寸前に許された上、顕彰された事件の碑）などを横目に見ながら亀山を目指す。関西本線の亀山駅の一つ手前の井田川駅にトイレがあったのでそれを借り、待合室で持参のお茶を飲んで15時半まで休憩。16時半頃に亀山から名古屋行き快速が出るのであと1時間でこれに間に合わすべく出発。駅のすぐ横に日本武尊の像があったのでこれを見学。計算では時速4kmで亀山到着が可能の筈であったが歩く道は線路を離れて迂回し、しかも山坂もあって、遂にこの電車を諦める。この辺りから少し焦りがあって疲れがたまってくる。17時頃になって漸く亀山の商店街（半分はシャッターが閉まっていた）に辿り着いたが、ここから駅までは急な下り坂である。この先は何も見ずにただただ駅を目指して歩き、最後は駆け出すようにして駅に駆け込み折から構内に入ってきた17時24分発名古屋行き普通電車に乗ったところでどっと疲れが出て、お互いにやや無口になる。名古屋で弁当を買ったり飲み物を補給しがてら待合室で暫時休憩の後19時31分のひかりで帰京、品川に9時5分着、9時10分発の横須賀線に乗り換えて21時半に帰宅。何とか無事に亀山までとの所期の目的を達成できた。これから一休みして次の鈴鹿越えの作戦を立てる所存。

経費は交通費 29500 円、宿泊費 18000 円、その他食費等約 11000 円、合計 59000 円であった。



写真1 海蔵橋から見た桜



写真2 日永の追分 右：京・大坂、左：伊勢



写真3 石薬師 北町地蔵堂



写真4 佐佐木信綱の生家にて



写真5 広重の庄野の白雨



写真6 松永忠志さんと幸子